

日本語の表現と技法 ——思考し表現する学生を育てるライティング指導の研究——

荻原 桂子・宮本 和典

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2014年11月13日受付、2014年12月18日受理)

はじめに

2014年2月、龍谷大学に於いて「第19回FDフォーラム」(公益財団法人大学コンソーシアム京都主催、文部科学省・京都府・京都市後援)が開催された。全国の高等教育機関に所属する教職員が参加し、「社会を生き抜く力を育てるために」をテーマに、フォーラムディスカッションが22日・23日の2日間にわたって実施された。社会を生き抜く力の養成は、2012年8月に出された中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—」とともに大学教育が産業界や地域社会とともにあることの重要性を訴えている。

1日目は「シンポジウムⅠ 京都発! 地域社会まろごと学習コミュニティ共に育ち、共に学び合う社会を創る」と「シンポジウムⅡ 未来を切りひらく学生を育てるには」に分れて実施された。筆者が参加したシンポジウムⅠの会場では、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長猪股志野氏から「大学COC(センター・オブ・コミュニティ)」の問題提起があり、「大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」という大学の社会貢献の重要性が強調された¹⁾。

2日目は13分科会に分かれて活動を実施した。筆者は第10分科会「大学におけるライティング指導の諸問題」に参加した。分科会では、論理的思考力と表現力を身に付けた学生を育てるために、ライティング・スキルの効率的指導を行うことは現在の大学教育にとって不可欠な目標であるという共通認識をもった。ライティング指導に対して初年次教育・専門教育・キャリア教育という3つの観点からの報告があった。午後の部では現在の大学教育が直面するライティング指導の諸問題を多面的に提示するために、グループワークによって情報交換や認識の共有を深めていくことを試みた。

今回のシンポジウムおよび分科会をとおして、大学初年次教育におけるライティング指導の重要性を再認識すると同時に、今回論理的思考力と表現力を身につけた学生を育てるために、ライティング・スキルの効率的指導の研究に取り組んだ。

1. 初年次教育としてのアカデミック・スキルズ

PISA（国際学習度達成調査）では読解力を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」と定義している²。

大学における初年次教育の重要性についての認識は、全国の大学で非常に高まっている。文部科学省の山下直氏は国語教育のなかでも表現指導の問題について「大学における表現指導の重要性を認識せざるを得ない現状において、高大接続、高大連携の視点はこれからの表現指導を論じる上で不可欠なものとなっていくであろう」としたうえで、表現指導と文法や語彙の学習の関わりを述べ、書ける大学生に育てるには中等教育と高等教育との連携が必要であると指摘する³。文法と語彙の学習と表現指導との関わりは重要であり、文のねじれや同類の節の重複、国語表記の基準を学ぶうえでも文法と語彙の学習は欠かせない。島田康行氏は「大学進学を目指す高校生は、文章を「書くこと」をどのように学ぶのだろうか。一方、大学に入学する学生には、どのような「書くこと」の力が求められているのだろうか」⁴という問題意識から、「書ける」大学生に育てることを提起している。島田氏の述べるように、書けない大学生が多いという現実には中等教育・高等教育が互いに責任を押し付け合うよりも、建設的に連携を図ったほうが生徒・学生にとって有益であると考え。初等教育・中等教育での作文指導には時間的制約が多いという現実から、効率よく大学での初年次教育で表現指導を充実させることが大事である。そのためには、文法と語彙といった単元でできる指導を初等・中等教育で重点化し、その延長として高等教育で表現指導につなげていくというのが理想であると考え。

大学生のための知的技法をなるべく早い時期に念入りに指導しておくことが、その後の学生の大学での学びをスムーズにすることは確かなことである。暗記重視であった中等教育とは違って、高等教育では自ら問題をみつけて問いをたて、情報を探し調べ、考えを整理し、まとめ表現するというプロセスを繰り返すことによって、学生はアカデミック・スキルズを身につけることができる。湯川武氏が「すでに確立した知識を追認し、暗記するだけでは、大学で行う学問とは言えない。すでに確立された知識に疑問をもち、批判的に思考し検証することが必要になる」⁵と指摘するように、高等学校では正答を探すことが重要であったが、大学では研究の基礎である問いを立てることから始めなければならない。そして、最終的には一人一人が自分の研究成果をプレゼンテーションできるように指導することが初年次教育に求められる課題となる。

大学での初年次教育で必修科目である「情報処理演習」は、アカデミック・スキルズの基礎力のひとつである。大学で提出するレポート・論文はほぼすべてパソコンで作成された文章であり、情報収集にもパソコンは欠かせないものとなっている。情報処理能力は知的技法

の習得に必要不可欠なものになっている。パソコンやスマートフォンを使い慣れた学生ではあるが、アカデミック・スキルズとして情報処理に精通した学生は案外少ない。まず、自分の伝えたいことを的確に伝える日本語の表現と技法を学ぶことが肝要であり、大学の初年次教育における日本語表現の一環として情報リテラシーが課題となる。

北村弘明氏が「インターネットなどで、今、この世界を駆けめぐる膨大な「情報」は、それが無条件に自分にとって「情報」であるわけではなく（単なる「データ」にはまだ評価がなされていない）、そこにある種の主体的な判断がなされて、はじめて自らの行動をとるための有益性をもつものになるということを忘れてはならない」⁶と指摘するように、情報（information）を活用して整理・分析して新しい認識を生み出す知的能力である知性（intelligence）にまで高めることが重要である。さらに、現代情報化社会がもたらした情報空間への警鐘として、佐々木健一氏は「今の大学生たちの多くは、入学するとき既にインターネットになじんでいます。パソコンを使ってないひとでも、携帯電話をもたないのは少数派で、多くのひとはスマートフォンをもち、それを使いこなしています。インターネットとつながると、無数の情報への通路が開けてきます」と指摘したうえで、情報の倫理性について述べている⁷。

情報化社会とは、浮遊する情報の空間のことです。事実、インターネットにアップされた情報は、アップした本人が削除しないかぎり、浮遊し続けます。アドレスがあって呼び出すことができますが、その「住所」は固定した物理的空間のなかの特定の場所ではありません。アドレスは呼び出し記号であり、そこに呼び出されてくる情報は、文字通り浮遊しているのです。浮遊する情報は、使えるなら使う、ただそれだけです。その情報源の信憑性など考えもしません。何しろ世界中に流通し、誰もが利用している情報なのですから。情報のこのような活用法の延長上に「コピペ」があります。イベントの情報も、美味しいラーメンの情報も、学問の学説の情報も均一化します。情報空間のなかでは、学問の領域だけを区画する意識はないでしょう。この風土のなかで「コピペ」は、自然に、無邪気に生まれてきます。学問にとって「コピペ」は特殊な現象ですが、現代の情報空間の側からみれば、学問こそが特殊なのかもしれません。学問の側からこのギャップを埋める努力をしない限り、「コピペ」は増殖してゆくに違いありません。

専門教育としての情報リテラシーにおいては、こうした情報の取り込み方や情報の取り扱いに関する倫理性の問題について指導しなければならない。コピペ問題とコピペ対策については「コピペ検出ソフト」⁸開発にいたったことでも問題の深さを物語っている。

大学で提出するレポート・論文に要求されるのは、オリジナリティー（独創性）とプライオリティー（優先権）である。課題に対する理解の正確さや使用する資料の的確さが重要視される。自分が書いた文章に、他の人が書いた文章・資料を引用するには、その出典を明示しなければならないことを徹底して指導しなければならない。

2. 初年次教育としてのアカデミック・ライティング

学士課程教育の根幹は、論理的思考力を養成するためのレポート・論文を執筆する日本語の表現と技法の獲得にあるといっても過言ではない。大学の初年次教育におけるアカデミック・ライティングの指導は、大学として組織的に取り組まなければならない課題である。学生の日本語の表現と技法の向上は、すべての教員の責任であり、大学での学びにふさわしい日本語力を身につけさせるためには、それぞれの大学にふさわしいカリキュラムデザインとしてのコースデザインや評価方法や指導方法の開発に力を注がなければならない。学年進行にともなって、基礎的な知的技法に関しての授業は少なくなってくる。資格や免許に必要な実験・実習の授業が増え、日本語の表現と技法に関する能力の養成は個々の学生の自学自習にゆだねられる。日本語の表現と技法の基礎学力のある学生は、研究論文作成において格段の成長をみせ、進学・就職試験においても好成績をおさめるという相乗効果を発揮する。初年次教育としてのアカデミック・ライティングの指導を専門教育、さらにはキャリア教育にどうつなげていくかが重要である。

本論では、立命館大学が初年次生科目として2012年度から実施した「日本語の技法」について、薄井道正氏の実践例を参考に考察する。立命館大学では、5学部8クラス（1クラス100名規模を想定）を6名の教員で担当し、共通シラバスに沿って、共通テキストを使用し、教材および指導案を担当教員全員で共有化したというが、学部の専門性を超えた教員間での連携は注目に値する。さらに、薄井氏は「問題提起」「仮説」「論証」という論文の3つの要素を授業設計のポイントに据え、全15回の授業を「論文へのアプローチ」「論理と論証」「パラグラフ・ライティング」「アウトラインの展開」の4つのカテゴリーに分けてモジュール化したという⁹。「論文へのアプローチ」では、高等学校と大学での学びの違いについて考えさせ、論文とは問題提起と仮説と論証からなることを理解させ、引用や情報収集の方法を学ばせている。「論理と論証」では、論理と論証や根拠と主張の関係（論証のプロトタイプ）について説明し、「パラグラフ・ライティング」ではわかりやすい日本語の文を書くための工夫について考えさせ、「アウトラインの展開」では論文の構造とアウトラインの展開、自己点検の方法を説いている。知識をつめこむような学びから、自ら問いを立てて論証していくという学びのスタイルの転換を、見事に定着させる細かい配慮がつくされた指導法である。薄井氏の提起する論証とパラグラフ・ライティングの技法は実践したい指導法である。

アカデミック・ライティングについて佐々木健一氏は「論文はエッセイや感想文、批評文、新聞の社説などとは違います。ある主題を立て、さまざまな根拠を挙げて、それを論証するのが論文です」¹⁰と述べ、論文の骨格は「何がどうであるか」を論証することであり、この「何」が主題、「どうである」がテーマであり、対象に対して主題を見つけることが大切であると

指摘する¹¹⁾。また、戸田山和久氏はプロトタイプを論文の本体 (body) と呼び、次の3つの要素「1. 問題提起と問題の分析・定式化 2. 主張 (問題に対する答え、「結論」とも呼ばれる) 3. 論証」からなると述べている¹²⁾。

論文を書くための日本語の表現と技法を習得し、論文のプロトタイプを理解するには問題提起となる自らの問いが必要である。島田康行氏によると「引用すること」は、高等学校だけでなく小学校・中学校の「国語」においても取り扱われることになっているという¹³⁾。初等教育・中等教育においても言語活動の例としてではなく、引用の知識は学ぶべき内容となっているのである。しかし、大学生となったばかりの学生は、自分の意見を主張するのに必要な部分を引用することや、引用した部分の内容について自分の意見を述べるという問題提起と主張ができない。大学での学びにおいては、自立的・探究的な学びが求められ、明確な問題意識を持ち、自ら問いを立て、未だ解明されていない未知のことがらを解明していく積極的な力が求められる。そのためには、基礎的な日本語の表現と技法を身につけ、上記の3つの要素からなる論文を書く力を養成することが大学の初年次教育に求められるアカデミック・ライティングの指導における重要な課題である。

本学の「日本語表現法Ⅰ」は、2学部3学科7クラス (人間発達学科4クラス、人間生活学科1クラス、栄養学科2クラス) を5名の教員が担当する。本学における「日本語表現法Ⅰ」実施にあたっては、共通シラバスを作成し、共通テキストによる初年次教育のコースデザインが設定されている。「日本語表現法Ⅰ」では、授業概要と到達目標を掲げる (表1)。

表1 「日本語表現法Ⅰ」授業概要と到達目標

授 業 概 要
大学では、自ら問題を見つけ、それを整理・分類・分析して、自分なりに答えを導きださなければならない。学びの基礎である「問いを立てて、調べ考え、表現する」プロセスについて説明し、アカデミック・スキルズの習得を目指した講義をする。毎回、共通テキスト「日本語表現法Ⅰ」のプリントを配布し、課題に対して練習問題を実施し、自己採点により自分の能力を把握し、日本語表現能力の向上を図る。成績評価に関しては、共通評価基準を前もって学生に告知し、成績評価のレポート (1200字) も全学共通評価基準で評価する。
到 達 目 標
日本語表記の技法を習得し、大学でのさまざまな文章作成に応用できるようになることを目標とする。講義では文章作法の基本的ルールを学び、担当教員の添削も実施しながら、論理的な日本語表現力を身につけ、アカデミック・ライティングに慣れることを目標とする。

共通シラバスには、授業担当者名・授業概要・到達目標を掲げ、授業計画として、各回の授業内容と授業方法を載せる。また、評価方法についても明示する。

3. 課題レポートとルーブリック

本学では、1クラス60名程度の課題レポートの添削指導をTAに頼らず5名の教員で実施するには、15回授業で5回が限度であると考える。課題の設定にあたって薄井氏はルーブリック（学習到達度状況を評価するための基準表）を作成し、教員は学生がどのレベルまで到達しているかを測れる客観的な尺度を共有することで、一貫性のある評価を行うことを提案している¹⁴。薄井氏のルーブリックを参照して本学「日本語表現法Ⅰ」の共通評価基準表を作成した（表2）。

表2 「日本語表現法Ⅰ」 共通評価基準表

評価基準（点数）	0点	5点	10点	20点
語レベル（20点） 誤字・脱字がなく、語・語句が適切に使われており、表記のルールが守られている。	誤字や脱字がかなり目立つ。	いくつかの誤りや無駄がある。	一、二カ所のケアレスミスはあるが、ほぼ間違いがない。	一カ所もケアレスミスがなく、正確な言葉が使われている。
文レベル（20点） 文体が統一されており、一文一義のわかりやすい文で書かれている。	誤りやわかりにくい文がかなり目につく。	数カ所の誤りがあり、わかりにくい文がいくつかある。	一、二カ所のケアレスミスはあるが、ほぼわかりやすい文になっている。	一カ所もケアレスミスがなく、わかりやすい文になっている。
文構成（20点） 接続語を適切に用い、文相互の論理関係が明確である。	論理関係がわかりにくい。	数カ所の接続語の用い方に不備があり、論理関係にあいまいさがある。	一、二カ所の接続語の用い方に不備はあるが論理関係にあいまいさがない。	接続語の用い方も適切で、文相互の論理関係が明確である。
文内容（20点） 複数の部分的な情報をもとにして、全体の事柄がまとまっている。	部分的な情報に不足があり、全体の事柄がまとまっていない。	部分的な情報はほぼ適切であるが、全体の事柄が明確ではない。	部分的な情報はほぼ適切で、全体の事柄もほぼ明確にまとめられている。	部分的な情報に過不足はなく、全体の事柄が明確にまとめられている。
文全体（20点） 読む人が必要とする情報を整理して、情報を言葉で具体的にわかりやすく説明している。	読む人が必要とする情報が未整理で、独りよがりな説明になっている。	読む人が必要とする情報の整理がうまくできていないため、わかりにくい。	読む人が必要とする情報を整理して、ほぼ具体的にわかりやすく説明している。	読む人が必要とする情報を整理して、具体的にわかりやすく的確に説明している。

薄井氏はルーブリックがもっとも効果的である点について「学生自身が自分の位置を客観的に把握でき、より高いレベルを目指そうとする「書くこと」へのモチベーションや「どのような問題をどのようにクリアにすればよいのか」といった目標意識を高められた」¹⁵と指摘する。昨今の学生の学習態度を考慮すると、学習のモチベーションを高めるという指導法は優れていると考える。ルーブリックや課題ごとのねらい、および評価ポイントを明確にするということは、表現を評価するうえで重要である。さらに、自分の書いた文章にはできるだけ入念に推敲を行うことの重要性を学生に指導することも大切である。そのとき実行したいのは、推敲を2度（書き終えた直後と2、3日後）行うということと声に出して読むということである。声に出すと呼応の不備や、ねじれ、語句の脱落などに気付くことができる。また、推敲するときのチェックリストを学生に明示するとともに、学生の文章を添削する教員のチェックリストとして共有することが大切である。

初年次教育としてのアカデミック・スキルの育成では中等教育との連携が課題とされることは述べたが、ライティング・スキルの育成では「日本語表現法Ⅰ」の担当教員間での綿密な連携が必須となる。共通テキスト作成とともに、シラバスにおける各回の授業のテーマと到達目標の確認およびルーブリックの作成には細心の注意が必要である。授業は、添削指導も含めて学生の書くことへの意欲を高めるような指導を心掛けなければならない。特に、高等学校では大学受験の小論文対策くらいしか添削指導を受けていないという現状¹⁶を把握して、大学での添削指導について「日本語表現チェックリスト」をまとめた。以下のリストは、評価基準設定においても有効な指導法であると考え（表3）。

表3 日本語表現チェックリスト

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 誤字・脱字がないか。無意味な空白はないか。② 記号の使い方は適切か。改行のとき、行頭を一まず空けているか。③ 語句の誤用はないか（決まり文句や外来語など）。不適當な表現や差別的な表現はないか。④ 文体は統一されているか（文末表現は適切か）。⑤ 仮名と漢字の書き分けはできているか（形式名詞・補助動詞は仮名表記にしているかなど）。⑥ 専門用語は正しく表記し、話しことばを使用していないか。⑦ 呼応は正しいか、ねじれや句読法による誤読の可能性はないか。⑧ 引用文は正しいか（引用文は原典の表記が原則であるが、改める場合は注がいる）。⑨ 送り仮名・現代仮名遣いは正しく使用されているか。⑩ 算用数字やアルファベットが全角文字になっていないか（これらはすべて半角文字）。 |
|--|

課題レポートに関しては、15回授業で5回実施する予定であるが、説明する文章（300字）を3回実施するにあたっては、1. 適切で明瞭な語や語句、記号を用いる、2. 文体（です・ます体orだ・である体）を統一する、3. 一文一義を原則に、一文はできるだけ短く書

く、4. 修飾語と被修飾語を近づける、5. 係り受けの関係を照応させる、6. 接続表現を使い、文相互の関係（論理関係）を明晰にすることを指導する。論証する文章（600字）を2回実施するにあたっては、7. パラグラフをつくる、8. 論点（問い）と主張（答え）を明確にし、主張は根拠と論拠でサポートすることを中心に指導する。15回の講義終了後には、成績評価としての課題レポート1200字を提出させるが、①から⑩の日本語表現チェックリスト（表3）を参考に、課題レポートに対して作成した共通評価基準表（表2）によって各担当教員が採点し成績評価をする。

ライティング指導については、個々の学生の学力の差や評価する側の教員の資質によってぶれやすい。表現を評価するというのは、共通評価基準があっても困難を極めるものである。評価が表現された内容におよぶ場合には慎重な判断が必要となる。こうした評価基準の確立には担当教員相互の組織的な取り組みが重要になってくる。

4. 共通テキストの作成

本学での総合共通科目「日本語表現法Ⅰ」は、初年次教育として初歩的なアカデミック・ライティング、レポートの書き方、日本語の表現と技法に特化したものである。「日本語表現法Ⅰ」の共通テキストの一部を資料として提示する（練習問題については省く）。

資料1 句読点の使い方

文章を書く場合、まず目を意識するということは、かなり重要である。なぜなら、文字は、ただの記号であるが、記号を原稿用紙のまず目に一字一字埋める作業によって、その人にしか書けない文章の文体とリズムが生み出されるからである。

(1) 句読点の使い方

句点「。」は、文の切れ目に打つ。読点「、」は、一文のなかで打つ。読点は、水泳の息継ぎにたとえることができる。百メートル泳ぐのに息継ぎをするタイミングは、個人によって違うだろう。しかし、泳ぐうえで一番よい息継ぎのリズムはある。息継ぎが多すぎると慌ただしい泳ぎになるし、少なすぎると息苦しそうなる泳ぎになる。一文のなかで、どこに読点を打つかは、文章全体にとっても、文体とリズムにとっても重要な問題になる。読点をどこに打つと読みやすい文になるかを考える。

① 文の主題となる語のあとに打つ。

- ・ 叙述の主題となる語のあと。
ゾウは、鼻が長い。
- ・ 助詞のつかない主語のあと。
わたし、存じません。

② 中止法（文の中止するところ）。

- ・ 『道草』を小説としてではなく、漱石の自伝として読んだ。

- ③ 文や語句を並べる場合、そのあいだに打つ。
- ・ 重文の場合。
おじいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行った。
 - ・ 一つの文に、述語が二つ以上ある場合。
青年は起きて、顔を洗った。
 - ・ 語句が二つ以上ならぶ場合。
やさしくて、頼もしい男性です。
 - ・ 同格関係の語のあいだ。
それは恐ろしい病原体、鳥インフルエンザであった。
- ④ 限定、条件を表わす語の後。
- ・ 限定や条件などを表わす前おきの文の後。
 - ・ 時、場合、場所、方法などを表わす語句が、文全体を限定する場合、その語句の後。
- ⑤ 文のはじめに用いられる接続詞、副詞の後。
- ・ 文のはじめに用いる接続詞の後。
しかし、彼には彼女がいた。
 - ・ 文のはじめに用いる副詞の後。
もしも、遅れていたら助からなかった。
- ⑥ 感動詞、呼びかけ、返事などの語の後。
- ・ はい、元気です。
- ⑦ 読み誤りや、読み悪さをさけるため、読点を打つとき最も注意しなければならない。
- ・ 彼は自転車に乗って逃げる男を追った。（彼は、自転車に乗って逃げる男……か、彼は自転車に乗って、逃げる男……）
 - ・ 結局娘は芸大にはいれなかった。（芸大に、はいれなかった。か芸大には、いれなかった。）
 - ・ ここからはきものをぬいでください。（ここからは、きものをぬいで……か、ここから、はきものをぬいで）
- ⑧ 文の成分を倒置した場合。
- ・ 愛の表現の困難さにつきる、人間の苦悩は。
- ⑨ 会話文、引用文などを「 」で囲んだ前後では、次のように打つ。
- ・ 述語に直接続く場合。
彼は、「きれいだね」とささやいた。
 - ・ 述語に直接続かない場合は、「と」の後に読点を打つ。
彼は、「きれいだね」と、彼女にささやいた。

(2) 句読点の重要性

句点は問題ないが、読点は、打つ場所やタイミングによって、文意や伝えたいことの細かいニュアンスが変化するので、かなり注意をはらって使うべきである。句読点の使い方、文章の勢いや調子が決まるといっても過言ではない。

資料2 Eメールの書き方

Eメール（電子メール、以下、メール）は、プライベートやビジネスにおいて欠かすことができない便利で手軽なコミュニケーション手段となっている。いつでも、どこでも、相手にすぐに送ることができるメールであるが、その特徴を理解し、メールを書くことが求められる。パソコンの画面をとおしてメールを読むため、手紙とは異なる点が多くあり、気をつけてメールのやり取りをすることで効果的に使うことができる。

(1) メールの基本的な構成

あらかじめ決められた項目に入力していくことになるので、それぞれの項目の使い方を理解しておく。

① 宛先 (To)

送り先のメールアドレスは必ず半角文字で入力する。1文字でも、メールアドレスを間違えて入力すると相手には届かない。パソコンには全角文字と半角文字があるので、メールアドレスが半角文字で正しいか、必ず送る前に確認する。To、Cc、Bccがあり、適切な使い分けが必要である。

② 件名 (Subject)

メールのタイトルとして、件名を必ずつける。メール内容が具体的にわかるように簡潔に表現する必要がある。受信メールが一覧形式で表示される場合には、件名、送信者、日時などの情報が表示され、メールを選択することで本文が読まれる場合が多い。メールを多くやりとりする人にとって、あいまいな件名のメールは、メール内容がすぐには分からないため、すぐに読まれないことになる。初めての人に対するメールには、件名にメール内容だけでなく、送信者もわかるようにしておくのがよい。

返信メールには件名に「Re:」がつくので、つけたままの方が受信相手にどの件でのメールかわかるが、やりとりが多く続き、メール内容が変わった場合は、「Re:」を取り除き、そのメール内容に合わせたタイトルにして、件名とメール内容は一致させておく。

③ 本文

メールは、パソコンなど多種の情報通信機器を利用して読まれるため、長文にならないように必要事項を簡潔に書き、相手が読みやすい文章を心がける。適宜改行を入れ、行数が長くなる場合は、段落ごとに空行を入れると読みやすくなる。用件を的確に伝えるために、5W1H（いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように）をきちんと書くことは、他の文書と同様であるが、特に、いつ（When）については、注意をはらう必要がある。なぜなら、メールがすぐに送ることができるという特性をもっているため、相手もすぐに読むだろうとの感覚での文章になりがちである。例えば、「明日10時に、お伺いします」という文章を、相手が明日、読んだ場合は、「本日10時に、お伺いします」の意味になるので、明確に、「いつ」を「〇月〇日10時」と書くべきである。

・宛名

本文の冒頭で、送り先となる相手の会社名・部署名・名前などを記し、まず誰に宛てたメールであるかを明らかにする。やりとりが頻繁な場合や社内メールでは、所属名を省略する場合がある。

・発信者情報

送信者のメールアドレスだけでは分からない可能性があるので、自分の所属・名前を記す。件名に自分の氏名を入れていても、本文に再度、記すのが丁寧である。相手が初めてメールを送る人の場合は、自己紹介やメールを送った経緯を記した文章を加え、どのように連絡先を知ったかを記すと、メールを受け取った相手が安心してメールを読むことができる。

・引用を利用する。

メールの返信をする際に、相手からもらったメールを引用すると内容が分かりやすくなる。引用をする場合には、相手の文章の文頭に引用符の「>」など、引用したことが分かる記号を付加して、引用することが一般的である。相手のメールの必要な部分を引用し、そこに自分の返信内容をつけることで、何に対する返信であるかが分かりやすくなる。

・箇条書き

日時など、箇条書きにできる項目は、箇条書きにする。箇条書きにすることで、引用する場合にも、引用箇所が明確になる。

・署名（シグネチャー）

送信者をはっきりさせるために、メールの最後には所属・名前・連絡先などの入った署名を入れる。あまり長くなり過ぎないようにまとめる。

(2) Eメール特有の注意点

①環境(機種)依存文字は使わない。

ちがう種類のパソコンや携帯電話でメールを読む場合に、正しく表示されない文字や記号が存在する。こうした環境(機種)依存文字を使ったメールは、受信した相手が読めない場合や、送信したメールとは異なった表示になってしまう場合があるので、注意すべきである。半角のカナ文字は、インターネットでは使わないことになっているので、メールやWebページでは使わない。

主な環境(機種)依存文字の一例

① ② ③ などの丸付き数字

I II III などのローマ数字

TEL ㈱ などの省略文字

m km kg などの単位文字

おわりに

インターネットで、世界が瞬時につながる時代にもかかわらず、協調とは程遠い紛争が世界中に絶えない。人々は、つながりを求めて彷徨い続ける。家庭や学校、社会や国家という容れ物はあるけれども、その中身の不安定さに人々の孤独は深まるばかりである。こうした厳しい社会を生き抜くために、日本語の表現と技法は重要な力となる。

日本語表現に必要な運用能力として、読解力・思考力・表現力がある。読解力とは、文章作成の土台である読む力であり、他者の意見や考え方を理解する能力のことである。思考力とは、論理的な思考の骨格であり、読解で得た知識・情報を論理的に整理・分析・類推し、自分の考えを組み立てる力や、その結果からさまざまな結論を導く能力である。表現力とは、豊かな語彙によって他者とコミュニケーションをはかる言語能力である。現代社会ではコミュニケーション力の不足による、さまざまな問題が起こっている。他者との関係性を築くための日本語表現力を高めることは、社会生活を営む人間にとって大切である。

考えて書くという言語行為について、井下千以子氏は「ある目標やテーマに向かい、問いを立て、考えながら書くプロセスは、一種の問題解決のための行動であり、創造的で発見的なプロセスでもある。それは学問の原型であり、深いレベルで考える力を鍛えることが期待できる」¹⁷と述べている。大学の学びのなかで重要なのは、自ら問題をみつけ、その問題を解き明かすための資料を調べ、整理分析し、自分なりに考えて答えを導くことである。与えられた答えを暗記して、試験に答えるだけでは高等学校までの学びと変わらない。大学での学びは自分でテーマと研究方法を考えださなければならない。大学での知的生産技術をアカデミック・スキルズという。なかでも、初年次教育においてはアカデミック・ライティングの技術の習得が重要な問題となるが、ライティング指導は初年次教育でのコースデザインだけで完結するものではなく、学士課程カリキュラムデザインにおいても継続して取り組まなければならない重要な課題である。

注

- 1 2013年度『第19回FDフォーラム報告集』公益財団法人大学コンソーシアム京都主催
2014年6月、pp.22 - 23。
- 2 『OECD 生徒の学習到達度調査～2012年調査国際結果の要約～』国立教育政策研究所
編、2013年12月、p.3。
- 3 山下直「国語教育（表現指導）」『表現研究』第97号、表現学会、2013年4月、p.20。
- 4 島田康行『「書ける」大学生に育てる』大修館書店、2012年7月、p.iii。
- 5 湯川武「アカデミック・スキルズとは」佐藤望編『アカデミック・スキルズ 第2版』
慶応義塾大学出版会、2012年9月、p.13。
- 6 北村弘明氏は「現代の若者は「どうせ自分のことなど、だれもわかってくれない」とい
うような自閉的なあきらめや居直りを口にする者も多くなっているが、皮肉にも現代の
「情報社会」はそのような態度を許さない方向に発展しつつある。「他者」がどのような
情報をもっているのか、その情報と「自分」とはどのように関わりがあるのか、「他者」
と「自分」とはどのような点で結びついていけばよいのか、などを刻々と判断していかな
ければならない時代なのである。「自分のことなど、だれもわかってはくれない」という
「ぼやき」はある意味ではあたりまえのことであり、「自分」が自分のことを適切に相手
に表現して伝える努力をしなければ相手には自分のことなどはわかるはずもない。また、
それは「他者」への自分の判断についても同様である」と現代における情報のなされ方か
ら若者の情報の現実を検証している。「「情報」から得るもの」北村弘明・真野須美子・
川井章弘・清水眞澄・宇留田初実編『情報と表現—日本語の表現と技法—』双文社出版、
2008年2月、pp.11-12。
- 7 佐々木健一「論文のモラル」『論文ゼミナール』東京大学出版会、2014年8月、p.108。
- 8 杉光一成氏（金沢工業大学）は2008年5月25日『朝日新聞』朝刊に「コピペしたレポー
ト、ばれちゃうぞ 検出ソフト開発」という記事で紹介されたコピペ検出ソフト「コピペ
ルナー」の開発者である。杉光氏は「コピペ」とは「コンピューターのコピー＆ペースト
機能を用い、他人の文章等を写して自分の文章等と詐称する行為」と定義している。
（「コピペ問題を考える—大学などで今起こっているレポート作成の問題と対応策—」第
10回図書館総合展フォーラム、2008年11月26日）
- 9 薄井道正「初年次アカデミック・リテラシー科目「日本語の技法」」関西地区FD連絡
協議会 京都大学高等教育研究開発推進センター編『ライティング指導のヒント』ミネ
ルヴァ書房、2013年3月、p.80。
- 10 佐々木健一「論文とは何か」同掲書、p.22。
- 11 佐々木健一「論文の主題を見つける」同掲書、p.60。

- 12 戸田山和久『論文の教室レポートから卒論まで』NHKブックス、2012年8月、p.90。
- 13 島田康行「『書くこと』に苦慮する大学生」前掲書、p.12。
- 14 薄井道正 前掲書、p.84。
- 15 薄井道正 同掲書、p.83。
- 16 島田康行 前掲書、p.4。
- 17 井下千以子「思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築——Writing Across the Curriculumを目指して」関西地区FD連絡協議会 京都大学高等教育研究開発推進センター編『ライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房、2013年3月、pp.12-13。

A Study on Japanese expression techniques

Keiko OGIHARA /Kazunori MIYAMOTO

Course of Principal Human Sciences, Department of Human Development,

Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1,Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi 807-8586, Japan

No English abstract